

聖書から見た共産主義の起源

第1回 神への信頼喪失から始まる不信と共産主義

1. はじめに

共産主義の起源について語られるとき、多くの場合、その原因は産業革命や資本主義の発展、貧富の格差、労働問題などに求められます。

確かにそれらは共産主義発生の重要な背景となりました。しかし、それだけでは説明できない問題があります。それは、なぜ共産主義がキリスト教文明圏の中から生まれたのかという問題です。

もし共産主義が単なる経済的矛盾の産物であるならば、同じような思想は、歴史上のさまざまな文明の中から現れても不思議ではありません。

しかし実際には、神への信仰を文明の基盤としてきた社会の中から、神を否定する思想としての共産主義が誕生したのです。

この事実を理解するためには、歴史を単なる出来事の連続として見るだけではなく、人間の内面との関係から見る必要があります。

『原理講論』には次のような一節があります。

創造目的を完成した世界は、あたかも一人の人間のように、互いに有機的な関係をもつ組織社会である。（『原理講論』p123）

この言葉は、社会や国家や文明が単なる人間の集合体ではなく、一人の人間を拡大したような存在であることを示しています。

もしそうであるならば、一人の人間の心の中に起こることは社会にも起こり、社会に起こることは文明全体にも起こるはずです。

このような観点から考えてみると、共産主義の起源を理解するためには、まず一人の人間がどのように神から離れていくのかを理解しなければなりません。

2. 人はどのようにして神から離れるのか

人は最初から神を憎んでいるわけではありません。むしろ神に期待し、神を信じ、神に助けを求めながら生きています。

苦難に直面すれば神に祈り、人生の意味を求めるときには神の導きを願います。これは古代の人々だけではなく、現代人も同じです。

しかし人生には、自分の期待どおりにならない出来事が数多く存在します。

真面目に生きていても苦しみを経験することがあり、善人が苦しみ、悪人が栄

えているように見えることもあります。また、熱心に祈ったにもかかわらず、願いがかなわないこともあります。

そのような現実直面したとき、人は神に問いかけます。なぜこのようなことが起こるのか、なぜ神は沈黙しておられるのか、なぜ神は助けてくださらないのかという問いが心の中に生じるのです。

この問いそのものは決して悪いものではありません。聖書にもそのような叫びは数多く記されています。

わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。なにゆえ遠く離れてわたしを助けず、わたしの嘆きの言葉を聞かれないのですか。（詩篇 22 篇 1 節）

しかし、その問いに対してどのような結論を出すかによって、その後の人生は大きく変わるのです。

ある人は苦難の中でも神を信頼し続けますが、別の人は失望を積み重ね、その失望を神への不満へと変えていきます。

そして、不満が解決されないまま心の中に蓄積されると、やがて不信へと変わり、最後には神そのものを否定するところまで至ることがあります。

3. 神への信頼が試される時

聖書には、苦難の中でも神への信頼を守った人物が数多く登場します。その代表的人物がヨブでした。

ヨブは財産を失い、子供たちを失い、さらには自らの健康までも失いました。それにもかかわらず、「主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」（ヨブ記 1 章 21 節）と告白し、神を否定する道を選びませんでした。

もちろん彼は苦しみましたし、自らの苦難の意味を理解できずに悩みました。しかし、その苦しみの中にあっても、神との関係そのものを断ち切ることはありませんでした。

ここで重要なのは、苦難そのものが人を神から離れさせるわけではないということです。

同じ苦難に直面しても、神への信頼を深める人もいれば、神への不信を深める人もいます。その違いは苦難の大きさではなく、神との関係の持ち方にあります。

神への愛と信頼が保たれているならば、人は理解できない出来事の中でも神を求め続けます。

しかし神への愛が冷え、信頼が弱くなれば、同じ出来事が神への不満や反発を生み出す原因となります。

したがって、神への否定は突然現れるものではなく、神との関係が少しずつ失われていく過程の中で形成されていくのです。

4. 文明もまた神への信頼を失う

この現象は個人だけに起こるものではありません。世界が一人の人間のような組織社会であるならば、個人に起こることは文明全体にも起こります。

キリスト教は本来、神への愛を中心として出発しました。初代教会の信徒たちは、迫害の中にあっても神を愛し、隣人を愛し、その信仰を守り続けました。

その姿は多くの人々を感動させ、キリスト教は世界へと広がっていきました。

しかし歴史が進むにつれて、教会はしだいに制度化し、権力化し、本来の精神が弱まる場面も生じるようになりました。

もちろん歴史上のすべての教会がそうであったわけではありません。しかし全体として見れば、人々が期待していた神の愛や正義を十分に示せなくなった時代があったことも事実です。その結果、人々の中に失望する者たちが現れました。

神を信じてきたにもかかわらず救われない現実や、教会が存在しているにもかかわらず不正がなくなるならない社会、さらには神の愛が語られているにもかかわらず苦しみが続く状況を目の当たりにしたとき、人々の心には失望が蓄積されていきました。そしてその失望は、やがて神への不信へとつながっていったのです。

5. 共産主義の起源を理解するために

共産主義は突然歴史に現れた思想ではありません。それは神への信仰を土台としてきた文明が、その信仰を失っていく過程の中で生まれた思想でした。

もちろん共産主義の発生には経済的要因や社会的要因も存在しますが、それらだけで神の否定が生まれるわけではありません。

その背後には、神への不信というさらに深い精神的要因が存在していました。そして神への不信は、神への愛と信頼の喪失から始まるのです。

この点において、一人の人間が神から離れていく過程と、キリスト教文明が共産主義を生み出していく過程は驚くほどよく似ています。

だからこそ、共産主義の起源を理解するためには、まず人間の心の中で何が起こるのかを理解しなければならないのです。

本シリーズでは今後、一神教はなぜ無神論を生み出すのか、なぜ神への愛が神への怨みへ変わるのか、そして、なぜ神を否定する思想が世界を席卷するようになったのかについて、聖書と歴史の両面から考察していきます。

そしてその過程を通して、共産主義の起源だけでなく、私たち自身の信仰がど

こへ向かっているのかについても考えていきたいと思います。

第2回 神に対する愛がなぜ怨みに変わるのか

1. 神を否定する人は最初から神を憎んでいたのか

今回は、共産主義の起源を理解するためには、人がどのようにして神への信仰を失っていくのかについて考える必要があることを考察しました。

そして、一人の人間の内面に起こることは、組織社会としての文明全体にも起こるという観点から、共産主義を文明規模で起こった信仰喪失の現象として捉える視点を提示しました。

それでは、なぜ人は神を否定するようになるのでしょうか。

一般には、神を否定する人は神に無関心な人であるかのように考えられることがあります。しかし実際にはそうとは限りません。

むしろ神への否定は、神に強い関心を持ち、神に期待し、神を求めていた人々の中から生まれることがあります。

神を全く信じていない人は、神に失望することはありません。しかし神を信じている人は違います。

神を愛し、神を信頼し、神に期待しているからこそ、その期待が裏切られたと感じたときに大きな衝撃を受けるのです。

したがって、神への否定を理解するためには、まず神に対する愛と期待について考えなければなりません。

2. 神に対する愛は期待を生み出す

ヨハネ第一の手紙には次のように記されています。

わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。（ヨハネの第一の手紙4章19節）

信仰の出発点は人間の努力ではありません。神の愛です。人は神に愛されていると感じるからこそ神を愛し、神が自分を導いてくださると信じるからこそ神を信頼します。

そして神が善なる方であり、正しい方であり、愛なる方であると信じるからこそ、自分の人生に対して希望を抱きます。

そのため、信仰には必ず期待が伴います。苦しみの中にあれば神が助けをくださることを願い、不正があれば神が正してくださることを願い、祈れば神が聞いてくださることを願います。

これらは決して間違ったことではありません。むしろ神に対する信頼があるか

らこそ生まれる自然な心の動きです。

ところが、その期待と現実との間に大きな隔たりを感じたとき、人の心には葛藤が生じます。そして、その葛藤をどのように乗り越えるかによって、その後の信仰の歩みは大きく変わっていくのです。

3. 失望はどこから生まれるのか

人生には理解できない出来事があり、熱心に祈っても状況が変わらないことがあり、神を信じていても苦難に直面することがあります。善人が苦しみ、悪人が栄えているように見えることもあります。

そのようなとき、人の心には疑問が生じます。詩篇 13 篇 1 節には、「主よ、いつまでなのですか。とこしえにわたしをお忘れになるのですか。いつまで、み顔をわたしに隠されるのですか」とあります。

この叫びは不信仰ではありません。むしろ神を信じているからこそ生まれる叫びです。

しかし注目すべきは、詩篇 13 篇がこの叫びで終わっていないことです。最後には次のように言い切ります。

しかしわたしはあなたのいつくしみに信頼し、わたしの心はあなたの救を喜びます。主は豊かにわたしをあしらわれたゆえ、わたしは主にむかって歌います。（詩篇 13 篇 5～6 節）

神への問いかけは、信仰の終わりではなく、信頼へと深まる入り口にもなり得るのです。

4. 観念的信仰と実感的信仰

しかし、すべての人が詩篇 13 篇の作者のように、苦難を通して神への信頼を深めるわけではありません。

ある人は試練の中で神との関係をより強くしますが、別の人は失望を積み重ね、その失望を神に対する不信へと変えてしまうことがあります。

では、なぜ同じ苦難に直面しても、神に対する信頼を失わない人と、神に対する不信へと向かう人がいるのでしょうか。『原理講論』には次のような指摘があります。

今まで神を信ずる信徒たちが罪を犯すことがあったのは、実は、神に対する彼らの信仰が極めて観念的であり、実感を伴うものではなかったからである。（『原理講論』 p34）

この指摘は非常に重要です。人は神について知識として理解しているだけで

は、試練のときに信仰を保つことができません。

神の存在を教義として理解しているだけでは、苦難の中でその信仰は容易に揺らいでしまいます。なぜなら、知識としての神は現実の苦しみよりも弱いからです。

しかし神の存在を実感している人は違います。自分の理解を超えた出来事に直面しても、神との関係そのものを失うことはありません。ここに信仰の大きな分岐点があります。

信仰が観念にとどまるならば、人は苦難に直面したとき神への不満に支配されやすくなります。しかし信仰が実感を伴うものであるならば、人は理解できない出来事の中でも神を求め続けることができるのです。

5. ヨブとカインの違い

この違いを考える上で注目したいのがヨブとカインです。

ヨブは極めて大きな苦難を経験しました。しかし彼は神を捨てませんでした。理解できない出来事に苦しみながらも、最後まで神との関係を断ち切ることはありませんでした。

一方、カインは自分の供え物が受け入れられなかったことによって心を乱し、その不満を解決できないままアベルを殺してしまいました。

ここで見落としてはいけないのは、神がカインに対して語りかけておられたことです。

「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのですか。正しい事をしてるのでしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せています。それはあなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません」。(創世記4章6～7節)

神はカインを切り捨てられたものではありません。むしろ彼に語りかけ、立ち返る機会を与えておられました。

しかしカインは、「なぜ神はアベルの供え物だけを受け入れられたのか」という疑問と不信を心の中で解決することができませんでした。

そのため、自分を立ち直らせようとして語りかけてくださった神の愛を感じ取ることができず、かえって心を閉ざしてしまったのです。

ここに、神に対する失望が不信へと変わっていく一つの姿を見ることができま

す。両者に共通しているのは、自分の願いどおりにならない現実に直面したことです。

しかし、その現実を神との関係の中で受け止めるか、自らの感情を中心として受け止めるかによって、その後の歩みは大きく分かれました。

ヨブは苦難の中でも神を求め続けましたが、カインは失望と怒りに心を支配されてしまいました。

神に対する怨みは、神を知らないところから生まれるものではありません。むしろ神との関係が十分に成熟していないところで、失望が解消されないまま積み重ねることによって生まれるのです。

6. 神に対する怨みから神への否定へ

期待がなければ失望もありません。愛がなければ裏切られたという感覚も生じません。信頼がなければ不信も生まれません。

その意味で、神への否定は無関心から始まるのではなく、しばしば神に対する期待が裏切られたと感じるところから始まります。

そして、その失望が解決されないまま積み重なると、不満は不信へ、不信は神への反発へと変わり、最後には神そのものを否定するところへ至ることがあります。

このような信仰喪失の過程は、一人の人間の中だけに起こるものではありません。組織社会としての文明もまた同じ道を歩むことがあります。

神への愛から出発した文明も、失望を積み重ねるならば、不信と怨みを抱き、ついには神を否定する思想を生み出すことがあります。

共産主義を理解するためには、この精神的過程を理解する必要があります。なぜなら、共産主義の根底には神への不信と怨みがあり、その背後には神への失望があり、さらにその背後には、キリスト教文明が抱いていた神への期待が存在していたからです。

今回は、「一神教はなぜ無神論を生み出すのか」というテーマを通して、唯一神への絶対的信仰がなぜ絶対的否定を生み出し得るのかについて考察していきます。

第3回 一神教はなぜ無神論を生み出すのか

1. 神を最も信じた文明から神を最も否定する思想が生まれた

前回は、神への否定は無関心から生まれるのではなく、しばしば神への期待が裏切られたと感じるところから始まることを考察しました。

そして、神への失望が不信に変わり、その不信がやがて神への反発や否定へと発展していく過程について見てきました。

そこで今回は、さらに一步踏み込み、一神教と無神論の関係について考えてみたいと思います。

一般的な感覚からすれば、神を信じる宗教と神を否定する無神論は正反対の存在です。そのため、無神論は宗教とは無関係なところから生まれた思想であるかのように考えられがちです。

古代にも無神論的な思想は存在しました。しかし、それが国家を形成し、世界的な勢力として広がった例はほとんどありませんでした。

そのような歴史的現象としての無神論的共産主義は、主としてキリスト教文明圏の中から現れました。言い換えれば、神を最も強く信じてきた文明の中から、神を最も強く否定する思想が誕生したのです。

これは一見すると矛盾しているように見えますが、実際には、この現象は一神教そのものが持つ特性と深く関係していると考えられます。

2. 一神教における唯一神信仰

申命記には次のようなみ言があります。

イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。（申命記6章4～5節）

ここには一神教の本質が示されています。

聖書の神は、多くの神々の中の一柱ではありません。天地万物を創造された唯一絶対の神です。そのため、信仰者の希望も祈りも願いも、すべてこの唯一神へ向かいます。

苦難の中にあれば神に助けを求め、人生の意味を求めるときには神の導きを願い、善と正義の基準も神に求めます。このように、一神教とは、人間の心の中心が唯一神に集中する信仰なのです。

このことは一神教の大きな力でもあります。なぜなら、人間はどのような状況に置かれても、絶対者を信頼することができるからです。

歴史上、多くの信仰者たちが、迫害や苦難の中でも希望を失わずに歩むことができたのは、この絶対的信仰があったからでした。

しかし、ここに一神教のもう一つの側面があります。

3. 絶対的信仰は絶対的失望を生み得る

人は神を信じるからこそ神に期待します。神は愛であると信じるからこそ助けを求めます。神は正義であると信じるからこそ悪が裁かれることを願います。

そして、神は善なる方であると信じるからこそ、自分の人生にも意味があることを期待します。ところが現実には、その期待どおりにならないことがあります。

戦争や災害が起こり、善人が苦しみ、悪人が栄えているように見えることがあります。また、熱心に祈っても状況が変わらないこともあります。そのような現実と直面したとき、人の心には葛藤が生じます。

神への期待が小さければ失望も小さくなりますが、神への期待が大きければ、その期待が裏切られたと感じたときの失望も大きくなります。

そして一神教では、その期待が唯一神へ集中しているため、失望もまた唯一神へ向かいます。

絶対的信仰は、人を大きく成長させる力になります。しかし、その信仰が失われたときには、絶対的否定へと転化する可能性も持っているのです。

4. 多神教との違い

この点は多神教との比較によってさらに理解しやすくなります。

もちろん多神教にはさまざまな形があり、一括して論じることにはできませんが、一般論として言えば、多神教では、神々がそれぞれ異なる役割を担っています。

そのため、ある願いがかなわなかったとしても、それが神という存在そのものの否定にはつながりにくい傾向があります。また、不幸や不条理の原因を一つの神に集中して求める必要もありません。

ところが一神教では、世界を支配しているのは唯一神です。そのため、人間の期待も疑問も不満も失望も、最終的にはすべて唯一の神に向かいます。

もし神が全能であり、全知であり、愛なる方であるならば、なぜこのような現実が存在するのかという疑問が生じるのです。

そして、その疑問に納得できる答えを見いだせなかったとき、人は神への不信を抱くようになります。

この意味において、一神教は極めて強い信仰を生み出すと同時に、極めて強い否定を生み出す可能性も持っていると言えるでしょう。

5. 無神論はどこから生まれるのか

詩篇には次のようなみ言があります。

愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。（詩篇 14 篇 1 節）

ここで聖書は、無神論を単なる知的結論として描いているわけではありません。実際には、その背後に人間の心の問題があります。

神への愛が冷えれば神への信頼も弱くなり、神への信頼が弱くなれば感謝の心も失われていきます。

そして、感謝が失われたところには不満や失望が生まれ、その失望が積み重なることによって神に対する不信へと発展し、最後には神そのものを否定するところにまで至ることがあるのです。

もちろん哲学的な理由から無神論を選ぶ人もいます。しかし歴史的に見れば、多くの無神論思想の背後には、神への失望や反発が存在しています。

この意味において、無神論は神と無関係なところから生まれるのではありません。むしろ一神教の信仰の中で育まれた神への期待が、大きな失望を経験したところから生まれる場合があるのです。

6. 絶対的信仰から絶対的否定へ

ここまで見てきたように、一神教は絶対的信仰を育みますが、その信仰が失われたときには、絶対的否定を生み出す可能性も持っています。

共産主義は、神への絶対的信仰が失望と不信を経て絶対的否定へと変わっていく、その歴史的な現れの一つとして理解することができます。

共産主義は単なる経済理論ではありません。その根底には無神論があります。そして、その無神論は、キリスト教文明が抱いていた神への期待が大きな失望へと変わり、その失望が神への不信へと発展していく過程の中から生まれたものと考えることができます。

したがって共産主義は、神と無関係なところから生まれた思想ではありません。むしろ神を信じる文明が神への信頼を失っていく過程の中で生まれた思想と理解することができます。

今回は、「なぜキリスト教社会は共産主義の温床となったのか」というテーマを通して、神への愛から出発した文明がどのようにして神への失望を蓄積していったのかを考察していきます。

第4回 なぜキリスト教社会は共産主義の温床となったのか

1. 共産主義はどこから生まれたのか

共産主義について語られるとき、その起源は、しばしばカール・マルクスの思想や産業革命以後の経済格差に求められます。

確かに、マルクスは共産主義理論を体系化した人物であり、労働者の貧困や社会的不平等も共産主義が広がる重要な背景となりました。

しかし、それだけでは共産主義がヨーロッパ社会に深く根を下ろし、さらには、国家を形成して世界的な勢力へと発展していった理由を十分に説明することはできません。

本シリーズでここまで見てきたように、人が神への期待を失い、その失望が不信に変わり、最後には神そのものを否定するようになる過程は、一人の人間だけではなく、文明全体にも起こり得ることです。

そうだとすれば、共産主義の起源を理解するためには、マルクスが登場した19世紀から考えるだけでは十分ではありません。

その思想を受け入れ、成長させる土壌が、それ以前のキリスト教文明の中にどのように形成されていったのかを見なければならぬのです。

なぜなら、思想は何もないところから突然生まれるのではなく、それを受け入れる精神的土壌があって初めて社会に根を下ろすことができるからです。

共産主義という思想がヨーロッパ社会に広がったという事実は、それ以前から、キリスト教文明の内部に神への失望と不信が少しずつ蓄積されていたことを示していると考えられます。

したがって、共産主義はマルクスという一人の思想家によって突然生まれたものではありません。その背景には、長い歴史の中で形成されてきた精神的土壌が存在していました。

その土壌を探ることこそが、本当の意味で共産主義の起源を理解することにつながるのです。

2. 初代教会が示した神の愛

キリスト教は本来、神への愛と隣人への愛を中心として出発しました。使徒行伝には初代教会の姿が次のように記されています。

信じた者の群れは、心をつにし思いをつにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた。（使徒行伝4章32節）

この姿の中に見られるのは、制度や強制による平等ではありません。彼らの共同生活は神から受けた愛への感謝から生まれたものであり、その感謝が自然に隣人愛として表れていました。

彼らは財産を共有することによって救われようとしたのではなく、すでに神の愛を受けた者として互いに仕え合っていたのです。

初代教会が多くの人々を引きつけた理由もここにありました。彼らは単に教義を語ったのではなく、生活そのものを通して神の愛を証ししていました。

そのため、厳しい迫害の中にあっても教会は成長を続け、多くの人々がその姿の中に希望を見いだしたのでした。

3. 制度化はなぜ必要だったのか

しかし、教会が拡大するにつれて組織化は避けられなくなりました。

信徒が増えれば指導体制が必要になります。教会を維持するためには制度も必要になります。また、異端的な教えから信仰を守るためには教理の整理も必要でした。

したがって、制度化そのものは悪ではありません。むしろ教会が歴史の中で存続し、信仰を継承していくためには不可欠な過程でした。

問題は制度の存在ではなく、その制度が本来の目的から離れてしまうことにあります。

本来は神への愛を守るために存在していた制度が、いつしか制度そのものを維持することを目的とするようになり、本来は信仰を助けるための組織が、組織の存続を最優先するようになることがあります。

この現象は教会だけではなく、あらゆる組織に共通して見られるものです。そしてキリスト教文明もまた、この危険から完全に自由ではありませんでした。

4. 形式化による信仰の衰退

制度が整えられること自体は必要なことですが、歴史の中では本来手段であったものが目的へと変わってしまうことがあります。教会もまた、その危険に直面しました。

教会が拡大し組織が大きくなるにつれて、信仰を守るために設けられた制度や規則は、しだいに複雑になっていきました。

本来それらは神への愛を助け、信徒たちを導くためのものでしたが、時が経つにつれて、制度そのものを維持することが優先される場面が現れるようになりました。

その結果、人々の関心は神との生きた関係よりも組織や権威へと向かい、信仰生活は内面的な変化よりも、外面的な秩序を重視する傾向を強めていきました。

このような現象は個人の信仰生活においても見られます。最初は神への感謝と愛によって始めた信仰であっても、いつしか習慣や義務だけが残し、その本来の目的を見失うことがあります。

祈りや礼拝が形式だけになり、神を求める心が弱まれば、外見上は信仰が続いているように見えても、その内側では生命力を失い始めます。

文明もまた同じです。初代教会が持っていた神への愛と隣人への愛が弱まり、信仰が制度によって支えられる状態が長く続くと、人々はしだいに教会の中に神の愛を見ることができなくなります。

そして、神の名は語られていても神の心を感じることができず、信仰はもっていても救いの実感が得られないという状況が広がる時、人々の心には神への失望が静かに蓄積されていくのです。

5. 神への愛を失った文明

ここで『原理講論』の次の記述は重要な意味を持っています。

初代教会の愛が消え、資本主義の財欲の嵐が、全ヨーロッパのキリスト教社会を吹き荒らし、飢餓に苦しむ数多くの庶民たちが貧民窟から泣き叫ぶとき、彼らに対する救いの喊声は、天からではなく地から聞こえてきたのであった。これがすなわち共産主義である。（『原理講論』p26～27）

この記述が指摘しているのは、共産主義の原因が単なる貧困ではないということです。

もし貧困だけが共産主義を生み出す原因であれば、古代の奴隷制社会や中世の封建社会において、すでに同様の思想が大規模に発生していたはずですが。

問題は、神への愛を掲げる文明が存在していたにもかかわらず、その理想と現実との間に大きな隔たりが生じていたことでした。

初代教会の信徒たちは、神を愛し、隣人を愛し、互いに助け合いながら生活していました。その姿は多くの人々に希望を与えました。

しかし、歴史が進むにつれて、人々は、神の愛を語る教会が存在しているのに、その愛が現実の中で示されていないと感じるようになりました。

その失望は単なる教会への不満にとどまりませんでした。神の愛を語る教会に失望した人々は、やがて神そのものにも失望するようになったのです。

共産主義が近代ヨーロッパにおいて発生した背景には、このような精神的変化がありました。

人々は単に貧しかったから絶望したのではなく、神への愛を掲げていた文明が、その理想と現実との間に大きな隔たりを生じさせたことによって、神への信頼を失っていったのです。

そして、神による救いへの希望を失った人々は、しだいに地上の改革や革命に新たな希望を託すようになりました。

ここに、『原理講論』が「天からではなく地から聞こえてきた救いの喊声」と語る共産主義の意味を理解することができるのです。

6. 共産主義は文明の病として生まれた

このように考えると、共産主義はキリスト教文明とは無関係に生まれた思想ではありません。

それは神への愛から出発した文明が、その愛を失っていく過程の中で生まれた思想でした。

共産主義は神を否定しましたが、その神への否定は何もないところから生まれたものではありません。その背景には、キリスト教文明が抱いていた神への大きな期待と、その期待が失望へと変わっていった歴史があったのです。

だからこそ共産主義は、多神教社会ではなくキリスト教文明圏の中から生まれたのです。

共産主義はマルクスから始まったものではありません。マルクスが登場する以前から、キリスト教文明の内部には神への失望と不信の土壌が形成されていました。共産主義は、その長い歴史の中で形成されてきた精神的土壌の上に成立した思想だったのです。

今回は、「神を失った文明は何を求めるのか」というテーマを通して、信仰を失った後も人間が幸福を求め続ける姿と、その行き着く先について考察していきます。

第5回 神を失った文明は何を求めなのか

1. 人は信仰を失っても幸福を求める

本シリーズでは、一人の人間が神への期待を失い、その失望が不信となり、やがて神そのものを否定するようになる過程を見てきました。

そして、その過程は、一人の人間だけではなく、文明全体にも起こり得ることを考察してきました。

しかし、ここで一つ考えなければならぬことがあります。それは、人は神への信仰を失ったとしても、幸福を求める心まで失うわけではないということです。

人は誰でも幸福を求めています。安心して生きたいと願い、苦しみから解放されたいと願い、自分も周囲の人々も幸せになってほしいと願っています。

信仰を持っていたときには、その幸福を神との関係の中に見いだしていました。神を愛し、神に愛され、その愛の中で隣人と共に生きることを喜びとしていました。

しかし、神を失ったとしても、人間は幸福への願いを捨てることはできません。

問題は、神に対する信仰を失ったあと、その幸福を何に求めるようになるのかということです。

2. 神への愛が生み出した共同体

使徒行伝には、初代教会について次のように記されています。

信者たちはみな一緒にいて、いっさいの物を共有にし、資産や持ち物を売っては、必要に応じてみんなの者に分け与えた。（使徒行伝 2章 44～45 節）

初代教会の姿を見ると、人々が互いに助け合い、共同体を大切にしていたことが分かります。

しかし、ここで重要なのは、彼らが共同体そのものを目的としていたのではないということです。

彼らはまず神を愛していました。そして、神から受けた愛に感謝していました。その感謝が自然に隣人への愛となり、互いに助け合う生活として現れていたのです。

共同体も弱者への配慮も、互いに助け合う生活も、神への愛から生まれた実りでした。

そこには、神を愛する心が中心にあり、その愛が人々を一つに結び付けていました。

3. 神を失っても理想は残る

人が神への信仰を失ったからといって、理想まで失うわけではありません。

弱い人を助けたいという思いも、公平な社会を築きたいという願いも、争いのない共同体を求める心も残ります。共産主義が多くの人々を引きつけた理由もここにありました。

そこには、貧しい人々を救いたいという願いがあり、不平等をなくしたいという思いがありました。人間同士が助け合う社会を築きたいという理想もありました。

しかし、神を失うと、それらの理想を支える中心もまた失われるのです。神への愛という土台を失った理想は、自らの力だけで理想社会を実現しようとする方向へ進むようになります。

人間は神への信仰を失っても、理想そのものを捨てることはできません。そのため、その理想は、しだいに神ではなく人間自身を中心とするものへと変わっていくのです。

4. 幸福の基準は何に変わるのか

イエスは最も重要な戒めについて尋ねられたとき、次のように語られました。

「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。(マタイ福音書 22 章 37~40 節)

ここには、人間の幸福の順序が示されています。まず神を愛することがあります。そして、その愛が隣人への愛となり、人と人との関係を豊かなものにしていきます。

しかし神を失えば、この順序が崩れるのです。それでも人は幸福を求め続けますが、その幸福を神との関係ではなく、物質的豊かさや競争や効率や損得によって測ろうとするようになります。

人生の価値も、人間そのものの尊さより、生産性や能力や社会的成功によって評価されやすくなります。

すると、人間は互いに愛し合う存在ではなく、競争し、利用し合う存在と見てしまう危険を抱えるようになります。

このように、神を失うとは、単に宗教を失うことではありません。幸福そのものを測る基準が変わってしまうことでもあるのです。

5. 共産主義国家が示したもの

共産主義は、このような神を失った理想が歴史の中に現れた一つの姿として考えることができます。

そこには平等への願いがありました。共同体への憧れがありました。苦しむ人々を救いたいという理想もありました。しかし、その中心には神はいませんでした。

そのため、人間は神に代わる新しい絶対的なものを求めるようになりました。それは国家であり、党であり、革命思想であり、指導者でした。

本来神だけが占めるべき絶対的な位置に、人間そのものや、人間がつくった制度や組織が置かれるようになったのです。

その結果、人間を解放するために始まった思想が、しばしば人間を管理し支配する方向へ進んでいきました。ここに、神を失った理想が抱える危険を見ることができます。

6. 神を失えば真の幸福も失う

このように考えると、共産主義は単なる政治思想ではありません。それは、神を失った文明が、それでも幸福を求め続けた歴史の一つの姿として理解することができます。

人間は神を失っても幸福を求めます。そして、その幸福を実現するために、平和を求め、平等を求め、共同体を求めます。

しかし、その出発点から神が失われるならば、人間は真の幸福を見失うこととなります。

そして、その失われた幸福を、物質や権力や競争や革命の中に求めようとするようになるのです。これは文明だけに起こることではありません。

一人の信仰者もまた、神への愛を失うならば、神に代わる何かを人生の中心に置こうとします。

だからこそ、共産主義の歴史を学ぶことは、一つの思想を学ぶことではありません。

それは、神を失った人間と神を失った文明が、なお幸福を求めながら歩んだ歴史を学ぶことであり、同時に、私たち自身がどこに真の幸福を求めて生きるのかを問い直すことでもあるのです。

今回は、本シリーズの総括として、「神への愛か、神への怨みか」というテーマを通して、一人の人間と文明との相似性を改めて振り返りながら、神への愛を失わない生き方について考えていきます。

第6回 神への愛か、神への怨みか

1. 共産主義の起源を探る旅の終わりに

本シリーズでは、「共産主義はどこから生まれたのか」という問いを出発点として考察を進めてきました。

一般には、共産主義は経済格差や社会的不平等から生まれた思想として説明されることが少なくありません。しかし本シリーズでは、その背後にあるより深い精神的な問題に注目してきました。

そして見えてきたのは、共産主義の起源を探ることは、単に一つの政治思想の歴史を調べるのではなく、人間がどのようにして神から離れていくのかという過程を探ることであるという事実でした。

第1回で、文明は一人の人間を拡大したような存在であるという視点を確認しました。一人の人間の中に起こることは文明にも起こり、文明に起こることは個人の中にも見いだすことができます。

そのため、共産主義の起源を考えることは、遠い歴史上の出来事を研究することではなく、私たち自身の心の問題を見つめることでもあるのです。

2. 人間の前には二つの道がある

人間は人生の中でさまざまな出来事に直面します。喜びもあれば苦しみもあります。祈りがかなえられることもあれば、なかなか答えが見えないこともあります。理解できる出来事もあれば、どうしても理解できない出来事もあります。

しかし、そのような状況に置かれたとき、人間の進む道は大きく分けて二つしかありません。

一つは、神への愛から信頼と信仰へと向かう道です。

人は神を愛することによって神を信頼するようになります。そして神を信頼することによって信仰を深めていきます。

たとえ理解できない出来事に直面したとしても、神には自分には分からないみ心とご事情があると信じることによって、神との関係を保ち続けることができます。

もう一つは、神への失望から不信と否定へと向かう道です。

理解できない苦難に直面したとき、その出来事を通して神への不満が生じ、その不満が解決されないまま蓄積されると不信へと変わっていきます。

そして不信はやがて神への反発となり、最後には神そのものを否定するところに至ることがあります。

この二つの道は、すでに聖書の中にも見ることができます。ヨブの道は神への愛から信頼へと向かう道であり、カインの道は失望から不信へと向かう道でした。

ヨブは理解できない苦難の中でも神との関係を捨てませんでした。カインは自らの失望と怒りを克服することができず、神からさらに離れていきました。

この二人の姿は、本シリーズで考察してきた二つの道を象徴的に示しているといえます。

本シリーズで見てきたのは、この後者の道が個人だけでなく文明全体にも起こり得るということでした。

3. 信仰の出発点は神への愛である

イエスは最も重要な戒めについて尋ねられたとき、次のように語られました。

「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」（マタイ福音書 22 章 37 節）

イエスはまず神を愛することを語られました。信仰の出発点は知識ではありません。制度でもありません。神学でもありません。神への愛です。

神を愛するから神を信頼します。神を信頼するから信仰が生まれます。そして信仰があるからこそ、人は苦難の中でも神との関係を失わずに歩むことができます。

本シリーズで繰り返し見てきたヨブは、その代表的な人物でした。

彼は理解できない苦難に直面しましたが、最後まで神との関係を捨てませんでした。それはヨブが神のすべてを理解していたからではありません。理解できなくても神を信頼していたからです。

4. 神への失望はどこへ向かうのか

一方で、人は神への愛を失うことがあります。神に期待していたにもかかわらず現実が変わらないとき、人は失望します。

そして、その失望を神との対話によって乗り越えることができなければ、不満や反発が心の中に蓄積されていきます。

パウロは、人間はもともと神を知ることができるかと述べています。

神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。（ローマ人への手紙 1 章 20 節）

その上でパウロは次のように続けます。

彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。（ローマ人への手紙 1 章 21 節）

ここで注目すべきことは、「神を知らなかった」のではなく、「神を知っていながら」という点です。

つまり問題は、神を知っているか知らないかという知識の問題ではありません。神を愛し、神を信頼し、神に感謝するという、神と自分との心情関係の問題なのです。

神への愛と感謝を失うとき、人はしだいに神への信頼も失っていきます。そして、その信頼を失った心は神への不信へと向かい、不信はやがて神への否定へと発展していきます。

本シリーズで考察してきた共産主義も、この流れの中で理解することができます。

共産主義は神を知らないところから生まれた思想ではありません。むしろ神を信じていた文明が神への信頼を失っていく過程の中から生まれた思想だったので

5. 文明もまた一人の人間のように歩む

第1回で取り上げたように、『原理講論』の123頁には、「創造目的を完成した世界は、あたかも一人の人間のように、互いに有機的な関係をもつ組織社会である」という記述があります。

この観点から見ると、キリスト教文明の歴史は、一人の信仰者が神への信仰を失っていく歩みと驚くほどよく似ています。

初代教会には神への愛がありました。その愛は人々を結び付け、迫害の中でも希望を失わせませんでした。

しかし、歴史が進むにつれて制度化が進み、信仰が形式化し、神への愛が弱まる時代が現れました。そして、神への愛が弱まると神への期待はしだいに失望へと変わり、その失望は不信を生み、やがて神を否定する思想が力を持つようになりました。

本シリーズ全体を振り返るならば、初代教会から共産主義に至る歴史は、一人の信仰者が神への愛を失い、失望と不信を経て神から離れていく過程を、文明規模に拡大した姿として理解することができます。

これは一つの文明に起こった出来事であると同時に、一人の人間の心の中にも起こり得る出来事です。

だからこそ、歴史は過去の話ではなく、私たち自身への教訓でもあるのです。

6. 共産主義の起源が問いかけているもの

本シリーズでは、共産主義の起源を一神教と無神論の関係、神への期待と失望、そしてキリスト教文明の歴史という観点から考察してきました。

そして最終的に見えてきたのは、共産主義の問題は単なる政治思想の問題ではなく、神と人間との心情関係の問題であるということでした。

神への愛から出発すれば、人は信頼と信仰の道を歩みます。しかし神への失望から出発すれば、不信と否定の道へ向かうことがあります。

この二つの道は文明の中にも現れますが、その出発点は常に一人の人間の心の中にあります。文明とは、一人一人の人間の心が積み重なって形づくられるものだからです。

したがって、共産主義の起源を探ることは、人間が神から離れていく過程を探ることであり、同時に私たち自身の信仰を見つめ直すことでもあります。

神への愛の道を歩むのか、それとも神への失望の道を歩むのか。その選択は文明だけではなく、今を生きる私たち一人一人にも委ねられているのです。